2Ua-5

１９６０年代の農村既婚女性の生活と意識
－東北Ｉ町若妻会の文集から－

昭和女大短大 瀬沼 頼子

【目的】高度経済成長期の都会では、便利で快適な生活へと急速な変貌が進み、生活意識や家族関係も一変した。一方農村では、特に嫁の立場にある女性たちを、地域の古い慣習や家族関係の問題、家事・育児、重い農作業等が、生活を辛く弱い立場においやってきた。当時の農村女性についての既往調査研究・資料はあるが、女性自身の手による本音の語られた資料は、そう数多くはない。本研究の目的は、農村の若い嫁自身が記述した事柄から、1.1960年代の農村地域の若年既婚女性の生活と意識を明らかにし、長い年月を経て今日では、地域活性化の重要な担い手となり、活発な活動が行われている、その 2.活動の原点となるものをこれらの中に見いだし、次世代へとつなぐ手がかりを得ることである。

【方法】東北地方Ｉ町の婦人会組織の中に1957年発足した若妻会は、会員の要望から機関誌（文集）を発行し、その中で日々の暮らしや日頃公言することのできないさまざまな思いを、短文や詩に託し綴っている。今回、この冊子『千草』に掲載された記述内容を整理分析し、上記研究目的を明らかにしていきたい。

【結果】テーマや記述方法は自由なために内容は多様であるが、今最も感じていることや関心のある事柄が記されていると言える。内容は、自分自身、家族のこと、地域に関して、若妻としての生き方について等である。農村のきびしい暮らしぶりの一端を綴っているものの、多くの女性が前向きであり、生活を変えていこうとする意識・意欲を持ち、若妻会に寄せる期待が如何に大きいかが明かである。ここには、諦観ではなく前向きな意識が現れており、今日のＩ町の女性たちの活動力の源につながっていると考えられる。